

妊娠と出生前検査の経験に関する
インターネット調査 2015

集計結果報告

2017年3月

編集：井原千琴・田中慶子・菅野摂子

発行：妊娠と出生前検査の経験に関する調査研究会

(妊娠研究会)

● **この報告書について**

井原千琴・田中慶子・菅野摂子編『妊娠と出生前検査の経験に関するインターネット調査2015』妊娠と出生前検査の経験に関する調査研究会2017年3月発行(科研費25283017、研究代表者柘植あづみ)

● **研究助成について**

平成25年度～平成28年度 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤(B)
研究課題:「医療技術の選択とジェンダー:妊娠と出生前検査の経験に関する調査」
研究課題番号:25283017
研究代表者 柘植あづみ

● **インターネット調査研究組織について(平成27・28年度:2015年1月～2017年3月)**

研究代表者

柘植あづみ 明治学院大学 教授

研究分担者

菅野摂子 電気通信大学 特任准教授

田中慶子 (公財)家計経済研究所 次席研究員

白井千晶 静岡大学 教授

研究協力者

石黒真里 明治学院大学 実習助手

井原千琴 日本筋ジストロフィー協会 認定遺伝カウンセラー

二階堂祐子 奈良先端科学技術大学 助手

はじめに

私たちは2013年4月から2017年3月まで「医療技術の選択とジェンダー：妊娠と出生前検査（注1）の経験に関する調査」という研究を行ってきた。

妊娠をめぐる医療技術が日々進歩するなかで、妊娠経験と出生前検査の経験も変化を余儀なくされている。それにもなつて妊娠にかかわるさまざまな選択とその社会的な意味も変化している。それを把握・理解する目的で、「医療技術の選択とジェンダー：妊娠と出生前検査の経験に関する調査」では、妊娠経験のある女性へのアンケート調査とインターネット調査、出生前検査を受けた／受けようか迷った女性・夫婦へのインタビュー調査、さらに出生前検査や遺伝相談を臨床で実施している医療者へのインタビュー調査をした。

これらの調査を実施した背景には、2003年に行った「妊娠と出生前検査の経験についての調査」（アンケート調査とインタビュー調査）がある。2003年当時から、10年後の調査を計画していたため、アンケート調査は2013年の4月～7月に行った。2013年4月には「新型出生前診断」とマスコミで報道された非侵襲的出生前検査（NIPT）（注2）が日本でも始まったが、調査時期が早かったためにNIPT受検者からの回答はごくわずかだった。また羊水検査を受けた人も20名ほどに限られた。（注3）

そこでNIPTを含めてより多くの出生前検査を受けた人の回答を得るために、2015年初頭にインターネット調査を行った。この『妊娠と出生前検査の経験に関するインターネット調査 2015集計結果報告』は、その調査の結果をまとめたものである。

出生前検査をめぐる大規模調査は日本では少なく、また、検査を受けた／受けないという行動だけではなく、その意識までも把握しようとした調査はほとんどない。出生前検査という専門的知識を必要とする内容の調査、また気持ちの揺れや葛藤を伴う医療の選択について調べるのにインターネット調査という手法が適切であるのかとの課題も生じた。今後の調査手法の改善も含めて、この結果に関する議論が活発になることを願っている。

柘植あづみ

（注1）出生前検査とは、胎児のうちに疾患や障がいなどがあるかを調べる検査の総称である。胎児に疾患や障がいがあるとわかっていても治療できるのはごく一部である。さらに疾患や障がいの重篤さは、生まれる前には限定的にしかわからない。そのため、親になろうとしている人たちは、検査結果を受けて、妊娠を継続するのか中絶するのかという厳しい選択を迫られることになる。

（注2）この検査は、妊婦の血液中にふくまれる胎児のDNA断片から胎児の染色体の状態を調べるもので、検査前に遺伝カウンセリングを受けることを条件として、費用が20万円を超えるほど高額であるにもかかわらず、希望者が急増した。

（注3）『妊娠と出生前検査の経験に関するアンケート調査 2013集計結果報告』参照